

石の上にも三年

17歳新聞

2018
7月

[第22号]



石屋製菓株式会社 代表取締役社長 石水 創 さん

1982年、札幌市生まれ。2004年に東洋大学法学部経営法学科卒業後に入社。その後、イギリス、スイスに留学し、語学と製菓技術を学ぶ。社内では製造・販売・財務・品質管理・商品開発など、いくつもの部署を経験する。2013年小樽商科大学大学院を修了し、同年に代表取締役社長に就任。「しあわせをつくるお菓子」をモットーに日々研究している。

石屋製菓株式会社は1947年に創業。主力商品の「白い恋人」は2016年に発売40周年を迎えた。2017年に道外初の直営店をGINZA SIXに出店。コンサドレ札幌(現・北海道コンサドレ札幌)が誕生したときから、オフィシャルパートナーとしてサポートしている。



▲お菓子と人に愛情たっぷりの石水さん。元気の源は北海道コンサドレ札幌。2017年に「白い恋人 奇跡の復活物語」を著書

編集新聞局員

責任者 加藤 樹香
編集長 佐藤 史
顧問教諭 中保 江梨
編集者 木村 伊吹 永瀆 詩苑

取材協力
石屋製菓株式会社

石屋製菓さんは「北海道を代表するお菓子」という印象が強いですが、苦勞したことはありませんか？

石水さん「2007年の夏に賞味期限改ざんの不祥事があり、営業も生産もストップしていた時期がありました。会社に来て、復活かのお菓子も作るお菓子もありません。復活するまでの3ヶ月は、衛生管理のミニマニュアルづくりや道内にある約500の店舗へお詫びに行ったり、お客様の信頼回復のために電話で応対したりと、自分たちがやるべきことをひとつひとつ努力しました。その頃が一番大変でしたね。」



▲「白い恋人」の製造過程。1枚ずつ目で確認。

新しいお菓子のアイデアは、どんな風に浮かびますか？

石水さん「国内、国外ともに行くことが多いのですが、そこにいるいろいろな料理やお菓子を食べて、そのうちで、『これはこうやったらうちの会社でも作れそうだな』とかを考えると、商品のイメージやアイデアを得ることが多いですね。東京でキャンデーを作っている場所に行ったり、『さういえば、うちの会社の創業当時はキャンデーだったなあ...』と思えば、原点復帰で

今風の飴にしたらどうかな...と想像できたのが「キャンデーラボ」です。そこから波及した商品が「キャンデーチョコレート」。チョコレートの中に、パチパチはじけるキャンデーを入れてみると面白いかなと思いましたが、お菓子作りには夢がありますね。」

新しいお菓子の発想で、ハッとしたことはありますか？

石水さん「娘に試作品を持っていったときに、美味しくないとは言われなかったけれど、明らかに食べようとしなかったことがありました。そういうときはハッとしたんですね。自分ではいいと思っていても、世代によって好まないことがあるんですね。もともとこうしたほうがいいといった素直な意見が出てくるので参考になります。『キャンデーチョコレート』を考えたのは、実は商品開発部のメンバーで、僕はとても面白かったのですが、僕の父親(代表取締役会長の石水勲さん)には『こんなの売れない』とダメ出しされてね。それでも販売したら、ヒットしました(笑)。世代の感覚というのは大事ですね。」

商品開発で苦勞したものは何ですか？

石水さん「苦勞したことは、焼き色が白色のパウムクーヘンをつくることでした。そのために、使う卵を工夫しました。黄身を白くするため、鶏に与える飼料から変えるなど試行錯誤しながら完成させました。」



▲冬期間限定の幻想的な「白い恋人パーク」のイルミネーション。北海道の冬を温かく演出している。

今後はどのようなお菓子を作っていくですか？

石水さん「チョコレートのお菓子ですね。当社はチョコレート菓子で業績を伸ばしてきましたので、それで勝負したいなと思っています。」

白い恋人パークで工夫していることは？

石水さん「最近では多くの外国人観光客がパークを訪れてくれますが、地元の方がいつ来ても楽しんでもらえるように、社員でいろいろなアイデアを出しています。展示物は『本物』にこだわって、パーク内も毎年少しずつリニューアルさせています。」



▲「パーク内の撮影スポット。製造日の欄が撮影日に。インスタ映え間違いなし！」

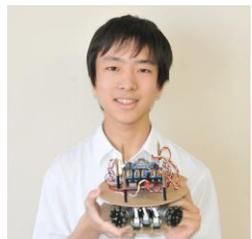
北海道のために、何かやりたいと思ってることはありますか？

石水さん「北海道のお菓子のレベルをもっと上げて、皆がもっと北海道を好きになってもらえるように地域貢献をしていきたいですね。北海道は世界一の場所だと思います。四季がはつきりしていて、お菓子がおいしく、人がやさしい。道産子の魂にはフロントティア精神があつて、困難や苦勞にも耐えながら、挑戦し続ける気持ち強いんですね。北海道の企業として地道な努力を積み重ねながら、スポーツであり、観光であり、文化であり、北海道を盛り上げるお手伝いをしたいです。」

高校生にメッセージをお願いします。

石水さん「高校生は一番楽しい時期かと思えます。何かに夢中になって楽しんでください。僕はスキーに夢中になっていましたね。何かに一生懸命やったという経験が、必ず将来に繋がってくると思います。頑張ってください。」

インタビュー



澤 風太郎
ロボット部長、高校2年生。ロボカップジュニア・ジャパンオープン2018和歌山大会に出場。生徒会会計を務めている。

ロボットとの出会い

小学4年生のとき、札幌大谷で開催された「ロボット教室」に母の勧めで参加したところ、とても面白くて興味を持ったそう。

やりがいを感じた瞬間

札幌大谷中学校に入社後、「ロボット愛好会」に入る。地道な努力が実を結び、全国大会出場をきっかけに、昨年度から「部」になった。「学校から活動を認められてとても嬉しかった。これからは、しっかりと実績を残して頑張りたい」と意欲的だ。

部活と生徒会の両立

生徒会が忙しく、中学の頃比べて部活に参加できる時間が減った。しかし、自分が部活にいても後輩たちが円滑に回している姿を見て「頼もしい」と思っている。「安心して生徒会活動ができるのは後輩のおかげ」と感謝している。生徒会では他の学科・コースの人たちや違う学年の人とも深く関わることができ、「視野が広がるとも楽しい」と、学園祭の成功に向けて、全校生徒のために、企画や運営に尽力している。

オオタニ高校のせんせいたちをご紹介します。

22 せんせいずかん

ホケンタイク科スイエイスキ類
サワダ メグミ

- ▼ 生息地
おいしい食べ物があるところ
- ▼ 類似注意
ミニマウス
- ▼ 元気の源
生徒の成長した姿
- ▼ 座右の銘
ポジティブ!

